

かながわ歌枕

— 図書館展示記録 —

星野 央恵

はじめに

本稿は2016（平成28）年11月11日から2017（平成29）年2月8日まで神奈川県立図書館（以下「当館」という。）で開催された企画展示の記録である。展示場所は本館1階展示コーナー、標題は「かながわ歌枕・読み継がれたイメージの系譜」とした。入場者数は1452名、アンケートの回収枚数は25枚であった。目録は200部印刷しすべて配布された。

本展示のコンセプトは大きく三点ある。

第一に、本展示の主題を「神奈川の魅力の再発見」とした。過去に担当した展示のアンケートで、今後どのようなテーマを期待するかという設問に対し、「神奈川について知ることができるテーマが良い」というものがあった。また、スポーツ文学についてなど神奈川を主題としていない展示のアンケートでは、「スポーツ文学が神奈川と関わる資料があれば良かった」というものが

あった。このことから、県立図書館に対するニーズは神奈川の魅力を改めて伝えることにありと感じ、今回の展示では神奈川を主題にしようと考えた。

二つ目は、テーマに対する新しい視点を観る人に提示することである。今回は神奈川の魅力を再発見するための切り口として「歌枕」を取り上げた。「歌枕」は一般に名所旧跡を指す。この「歌枕」に着目して神奈川に関する資料を見れば、古代から現在に至るまで神奈川の景勝地とされた場所が文学における舞台装置としての側面を持つことや、浮世絵、鉄道唱歌などさまざまな芸術分野にも関わり、観光など社会的な影響を与えたことが分かるだろう。また、地名にまつわる歴史など、見る人の興味を喚起し視野を広げる契機になるはずだ。

三点目は、当館の貴重なコレクションを紹介することである。図書、雑誌だけでなく写真、絵画、絵葉書、短冊などの資料が一堂に会することを意図した。特に今回展示をした「飯田九一文庫」や浮世絵などは閲覧機会の少ない資料であり、当館が所蔵していることがあまり知られていない。企画展示は当館の広報という一面を持つのであるから、貴重なコレクションと多様な資料群を誇ることが伝わるよう展示資料を選定した。

また、持ち帰ることのできる資料として、展示資料目

第一章「歌枕」という新視点

歌枕とは、広義としては和歌に詠み込まれる歌ことばを指していた。日本人にとって韻律を持つ言葉、特に和歌は身近な表現であったと同時に非日常を彩る特別な言葉でもあった。この二律背反を内包する歌ことばによって、日常語や韻律を持たない散文とは異なる言葉で和歌の世界観を作り上げようとしていたのだろう。

現在の歌枕は名所旧跡の意味で用いられる地名を指すことが多く、今回の展示でもこの意味で使用している。普段行く場所とは違う名所旧跡としての地名は普通の言葉でありながら非日常性を持つ言葉である。また、地名はその土地の信仰と結びついた言葉でもあった。時代と共にその信仰は薄れたが、和歌に詠まれた地名は伝統となり、共通の類型的連想を促す言葉となっていく。歌枕の枕とは、典拠、根拠を意味する。三十一文字の限られた世界を豊かにする連想の連鎖の中で、元となる言葉の一つが地名であり「歌枕」であった。例えば、京の「吉野」といえば桜か雪、「龍田山」といえば紅葉を連想する。また、「飛鳥川」といえば「無常」のように、景色だけでなく人生観とも結びつく。「歌枕」は先例を踏まえた上で、景色、その景色と結びついた心情、物語までも引張り出す役割を持っているのである。連想であるから、

詠む人が実際に見た情景ではなく、伝聞や憧れ、理想の地を詠むこともあった。ここに、単なる景勝地ではなく「歌枕」を切り口とした理由がある。副題とした「読み継がれたイメージの系譜」はまさしく、人々が歌に詠み、またその歌を読むことで受け継がれてきたその土地、地名が描き出すものに焦点を当てたいのである。

このような「歌枕」は「旅」と大きく連関する。例えば松尾芭蕉は『おくの細道』(1702年)にあるように、東北の歌枕を訪ねて旅をした。『大鏡』(1025年頃未詳)等で描かれる藤原実方は、陸奥へ左遷される際に一条天皇に「歌枕見てまぬれ」と命じられた。この例では辛い左遷を「歌枕を見に行く」と優美に表現している。このような例からも和歌に詠まれる地名を実際に見たいと思ひ、憧れを抱いていたことが分かる。そして実際に旅をしてその景色を体験する物語が生まれる。「歌枕」はその地名にまつわる様々な物語を読む人に提示してくれるのである。

その傾向は早く『万葉集』(759年以降)の時代に散見し、『古今和歌集』(905年頃)以後の王朝物語の時代で一般化した。歌枕は和歌だけでなく大和絵などの重要な構図ともなる。『伊勢物語』(900年頃未詳)や『更級日記』(1020年頃、菅原孝標女)から『海道記』(1223年頃未詳)『東

録とともに神奈川の「歌枕」を一覧表に作成、配布した。これは和歌に詠まれた地名としての「歌枕」であるが、「歌枕」の原点である「和歌」を知ることでもまた新たな発見の可能性を企図している。



図1 展示風景1 (入口) 職員撮影の写真も掲示

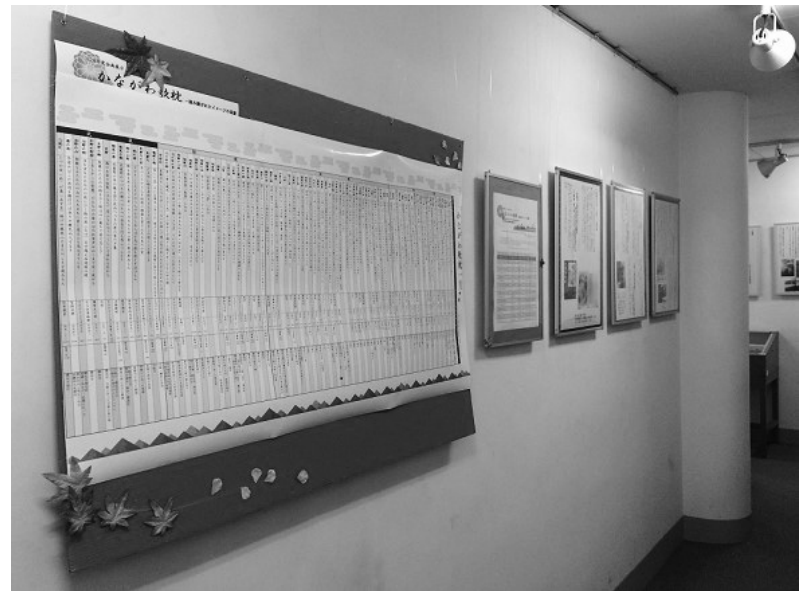


図2 展示風景2 (入口背面) 「歌枕一覧」(最終頁 図11) を掲示

『関紀行』(1242年末詳)『十六夜日記』(1283年頃阿仏尼)のような紀行文まで歌枕を巡り、歌を詠み旅の感慨を述べるというスタイルが確立している。後の『東海道名所図会』(1797年秋里籬島)などの観光案内書にも繋がり、近現代の和歌の世界につながっていく。

では、「神奈川」の歌枕はどうか。これが、本展示において肝要である。江戸に政治の中心地が移るまで、神奈川は西の京から見た東国であり、都人が神奈川を訪れたという和歌や文章はあまり残されていない。それでも、『万葉集』においては「足柄」が東歌の中に登場し、『古今和歌集』においても現大磯にある「こよろぎの磯」が詠まれている。県西の地名が多いが、中には県央と思われる地名もあり、興味を引く。鎌倉や江ノ島が出てくるのは鎌倉幕府が開かれ、『金槐和歌集』(1213年源実朝)などが出てから顕著であり、以降江戸時代の名所図会などにもたびたび登場し、東海道の発達によって金沢八景や横浜の宿場も名所として知られるようになっていく様子が分かる。詳細については後述する。

このことから、本展示の構成は西から東へ地域ごとと並べ、主な歌枕を紹介していくものとした。

それである。神奈川には山川海といった自然や近現代建築、歴史的風景などの日本らしいもののほとんどを備えていると改めて実感するかもしれないが、再発見とは言えない。もしここに再発見の余地があるとすれば、それはこのイメージそのものではない。たとえば、そのイメージの根拠としての地名すなわち歌枕を眺めてみる。具体的な神奈川の地名が連想を生じさせ、イメージを構築しているその過程を考えるために歌枕を並べて見ればどうだろうか。

そこで、『和歌の歌枕・地名大辞典』⁽¹⁾から神奈川の地名に関する歌枕を抜粋し、そこに挙げられている例歌作者、典拠、相当すると考えられる現在地の一覧表を作成した。これを「かながわの歌枕一覧」(最終頁図1)として展示室に掲示し、A4版に印刷したものを配布した。これを見ると、先ほどの神奈川のイメージから近現代の要素を除けば、江戸時代、平安時代と時代を遡ってもなお変わらずに浮かび上がることが分かるだろう。と同時に、今日ではもはやどここのことを指すのか分からない、馬場あき子が『歌枕をたずねて』⁽²⁾で言うところの「非在の場所」となっている地名もあることに気づくだろう。

先人たちによって表現され共有されてきた神奈川の内

第二章 地域で並べる構成

本展示の章立ては以下のとおりである。

- 1 「相模」と「あしがら」・箱根から大磯へ
- 2 霊峰「大山」・相模嶺・相模川
- 3 歌と観光・江ノ島・鎌倉・横須賀
- 4 万葉から近代へ・川崎・横浜

この構成は副題の神奈川の「イメージの系譜」が見えるよう意図した。それは端的に言えば、西の「足柄」から始まり、東の「横浜」に終わる。するとたとえば旧国名の「相模」が「険み」から来ているというように、都から見た「東の国」は足柄や箱根の「山」のイメージであったが、東海道の発達や鎌倉、江戸に政治の中心地が移動したことから、東の「鎌倉」や「江ノ島」、そして近代の横浜などの港町のイメージにつながるというようなことが見えてくる。

しかしこのイメージは決して真新しいものではなく、むしろ現在の神奈川の典型的イメージであるといえる。神奈川には海があって、山があって、そこには神社仏閣等の信仰のシンボルがあり、人々が集まり栄える港町がある。春には桜が咲いて、冬には雪が積もる四季折々の自然がある。この風景に目新しさはなく、神奈川は日本の縮図といった表現がなされることがあるが、まさしく

イメージ、または埋もれてしまった過去の景勝との出会い、その一端を「歌枕」が担っている。

第三章 歌枕紹介

以下に展示資料と展示パネルの内容を中心に各歌枕の紹介をする。「かながわ歌枕 地図」(図3)に示すとおり、①足柄、②箱根、③箱根山と箱根神社、④土肥一湯河原、⑤こゆるぎの磯、⑥鳴立沢、⑦さがむね(相模嶺)、⑧大山、⑨とやの(等夜乃野)、つむがの(都武賀野)、⑩江ノ島、⑪鎌倉山と星月夜の井、⑫鶴岡、⑬みなせがは、⑭三浦崎、⑮多摩川・多摩の横川、⑯川崎、⑰横浜

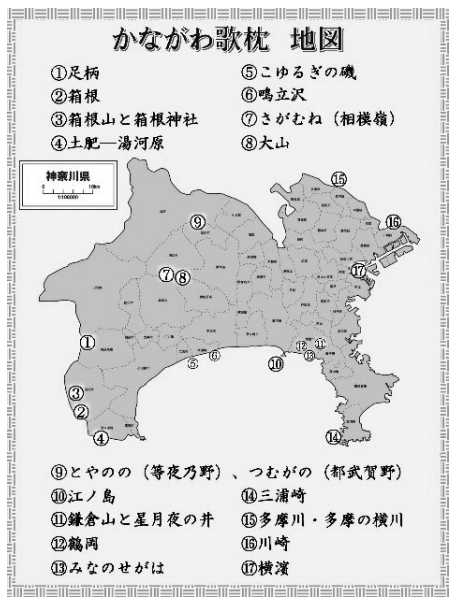


図3 かながわ歌枕 地図(筆者作成)

⑩江ノ島、⑪鎌倉山と星月夜の井、⑫鶴岡、⑬みなのおせがは、⑭三浦崎、⑮多摩川・多摩の横川、⑯川崎、⑰横濱の十七項目で構成し、地図は神奈川県ホームページ上の白地図（現行の行政区分）を使用した。
以後、章立てに沿ってその内容を記述する。

第一節「相模」と「あしがら」・箱根から大磯へ (一) 東国への要所「足柄」

相模国足柄は京から見た「東路」の始まりであった。『萬葉集地名歌総覧』^⑤によれば、相模道は足柄峠を越えて相模国府を経、海岸近くを進む古代の東海道であり、足柄国府から相模嶺（大山）を北に見つつ余綾浜を通過し、さらに海岸沿いに東に行き現在の藤沢、鎌倉に至り、走水（横須賀市観音崎付近）から渡海し、上総国へ向かうのが一般的だったようだ。

『古事記』には、足柄の神を討った倭建命（一般読みはやまとたけるのみこと。一般表記は日本武尊）が足柄峠で弟橘比売命（一般読みはおとたちばなひめ。一般表記は弟橘媛）をしのび「わが妻よ」と嘆いたことから足柄峠から東を「あづま（吾妻）」と称するようになったという地名伝説が見られる。その弟橘媛が走水で詠んだとされる次の歌に旧国名の「相模」が詠まれる。

さねさし相模の小野に燃ゆる火の

火中に立ちて問ひし君はも

（古事記 景行二四 弟橘比売命）

【意味】相模の野原に燃える火の、炎の中に立って、私の安否を気づかい、呼びかけてくださったあなたよ。^④「さねさし」は「相模」を導く枕詞で、「さ」は美称の接辞、「ね」は「嶺」、「さし」は勢いが良いことを表すという説がある^⑤。倭建命の乗る舟の前に立ちはたかった荒海を鎮めるため身を投げた弟橘比売の物語の、春の恋歌として伝えられている。美しく凛とした山々の中に「相模」があるが、この歌が詠まれたのは「走水」で、情景は回想であることが明示されているがゆえに回想の中の陰しく気高い山々と今目の前に広がっている豊かな海とが読者に提示され、壮大な自然を感じさせる。

さて、その伝承に支えられ、「足柄」は旅路と共に過去をかえりみるように歌われることが多い。

足柄の箱根飛び越え行く鶴の

ともしき見れば大和し思ほゆ

（万葉集 卷七「羈旅」一一七五 よみびとしらず）

【意味】足柄の箱根の山を飛び越えて行く鶴の羨ましい姿を見ると、故郷の大和が思い出される。^⑥

「足柄」を越えるところこそは東国であり、一度これまで

の道程に思いを馳せ故郷を思う歌だが、そうさせるのはそこが東国の始まりである「足柄」だからである。

他に「足柄の関」という語もあり、『枕草子』（96年頃 清少納言）の「関は」の段にも見られ、『更級日記』でもその足柄越えが難路であった様子が記されていることから、東国への難儀な旅を連想させる。しかし歌枕としての「足柄」は「足」に掛け、「足が軽い」の意味で詠まれることもあった^⑦。それは、足柄の山の木で船を作ると、船足が軽かったと知られていたことから来るといふ。

とぶさ立て足柄山に船木伐り

木に伐り行きつあたら船木を

（万葉集卷三・三九一 沙弥満誓）

【意味】鳥総を立てて足柄山で船木を伐り。それをただの材木として伐って行ったよ。惜しい船木だったのに。^⑧ここでいう「鳥総立て」は、舟を作るために伐採した木の切り株に、その木の葉の茂った枝を差し込み、山の神に祭ることを指す。

論文「中世の旅の歌枕と東国」^⑨は、平安時代頃には、実際の旅路ではなく、たとえば京の都にいながら想像して、あるいは聞き伝えのイメージに仮託して思いを詠みこむということが行われていたことを指摘している。同

論文では、次の『拾玉集』（1346年慈円）の歌には、京と鎌倉を近くしたいという政治的な意図もあったのではないかと述べている。

通ひなれて東も近し足柄の

関路はるかに思ひしかども

（拾玉集 百番歌合 一八五五 慈円）

【意味】通い慣れて見ると、東国も近く思われるから足柄の関への道は遙か遠いと思っていたが。^⑩

この歌が生まれたのは箱根峠を伊豆へ下る途中の鞍掛山であるといわれており、頂に歌碑が建てられている。

(二) 旅の名所「箱根」

箱根越えといえ、そこから臨む富士が有名であり、『伊勢物語』の東下りの段にも富士が登場するのだが、箱根から臨む「海」を見出したのは実朝といえるかもしれない。

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や

沖の小島に波の寄る見ゆ

（金槐和歌集 六三九 源実朝）

【意味】箱根の山道を越えてくると、急に視界が開け、広々とした伊豆の海の沖の小島に、波の打ち寄せているのが手に取るように見える。^⑪

また、早川沿いの旧道は箱根で最も古い道で、湯坂道と呼ばれており、『十六夜日記』にも登場する。『十六夜日記』は、鎌倉時代の歌人、藤原為家の側室、阿仏尼によって記された紀行文で、京都から鎌倉への道中の紀行を書いているが、その際に箱根を越えている。

東路の湯坂を越して見渡せば 塩木流るる早川の水
（十六夜日記 阿仏尼）

【意味】東国の街道の難所であります湯坂を、やっとの思いで越して、ほっとして眺めますと、まだまだ安心はできません。藻塩木が流されている、名も早川という激流が目の前にございます。

俳句・川柳の世界でも箱根は詠まれており、次の松尾芭蕉による句は大磯にある嶋立庵に石碑がある。

箱根こす人もあるらし今朝の雪
（松尾芭蕉 笈の小文 1709年）

【意味】今日箱根を越えなくてはならない人もいるらしいですが、今朝はこの平地でも雪が降っていますから、さぞ難儀なことでしょね。

次のような川柳もある。
朝帰り敷居か箱根八里ほど
（誹風柳多留（1765-1840年） 四二八 五友）

【意味】今日箱根を越えなくてはならない人もいるらしいですが、今朝はこの平地でも雪が降っていますから、さぞ難儀なことでしょね。
次のような川柳もある。
朝帰り敷居か箱根八里ほど
（誹風柳多留（1765-1840年） 四二八 五友）

【意味】今日箱根を越えなくてはならない人もいるらしいですが、今朝はこの平地でも雪が降っていますから、さぞ難儀なことでしょね。
次のような川柳もある。
朝帰り敷居か箱根八里ほど
（誹風柳多留（1765-1840年） 四二八 五友）

【意味】今日箱根を越えなくてはならない人もいるらしいですが、今朝はこの平地でも雪が降っていますから、さぞ難儀なことでしょね。
次のような川柳もある。
朝帰り敷居か箱根八里ほど
（誹風柳多留（1765-1840年） 四二八 五友）

【意味】今日箱根を越えなくてはならない人もいるらしいですが、今朝はこの平地でも雪が降っていますから、さぞ難儀なことでしょね。
次のような川柳もある。
朝帰り敷居か箱根八里ほど
（誹風柳多留（1765-1840年） 四二八 五友）

【意味】今日箱根を越えなくてはならない人もいるらしいですが、今朝はこの平地でも雪が降っていますから、さぞ難儀なことでしょね。
次のような川柳もある。
朝帰り敷居か箱根八里ほど
（誹風柳多留（1765-1840年） 四二八 五友）

（四）相模の名湯「土肥」―湯河原
東国にも古く著名な温泉地は少なくないのに、万葉集に詠まれた湯は「湯河原」だけである。鎌倉時代には「相模国土肥郷」と呼ばれていたことが分かり、温泉地「湯河原」のことであるとされている。場所は現在の万葉公園の橋の上流あたりであるが、埋め立てられて河原はない。

足柄の土肥の河内に出づる湯の
世にもたよらに児ろが言はなくに

（万葉集 卷十四 三三六八 よみびとしらず）
【意味】足柄の土肥の河内に湧く湯のように、心が揺れているとは決してあの子は言わないのだが。

箱根全山蟬の連歌や

宗祇の忌

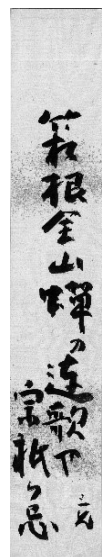


図4 中野三允 短冊 飯田九一文庫

（三）神宿る山―箱根山と箱根神社

箱根山には箱根権現が祀られており、箱根神社には平安時代の女流歌人相模が百首の詠歌を奉っている。相模の守となつた夫、大江公資とともに任地「相模」に赴いた折のことだという。

『相模集』（成立年未詳1024年頃）の次の歌には箱根山で祈る様子が詠まれている。

ふたつなき心にいれてはこね山
祈る我が身をむなしがらすな
（相模集五一九 相模）

【意味】ふた心ない私をお心にとめてくださって、箱根山の向こうの権現様にお祈りする我が身を、どうぞ空しい思いにさせないでください。

ここで「箱根」の「箱」の縁で「二」と「蓋」に掛け

なお、この「足柄」は「あしがり」と読み、ほかにもそのような例が多いが、これは訛音であり、東国方言と考えられているが、『万葉集』の東歌、防人歌にある「足柄」11例のうち「あしがら」は6例「あしがり」は5例とほぼ半々であることから、どちらも通用していたと思われる。

（五）こゆるぎの磯―「大磯」

「こゆるぎのいそ」は古代の相模の国府が置かれた旧余綾郡の海浜であり、現在の磯から小田原にあたる。「こゆるぎ」「こゆるぎ」「こゆるぎ」などの表記があるが、前項「足柄」と同様にどれも同じように通用していたと思われる。玉藻や千鳥を景物に多くの詠歌が生まれている。



図5 池田永治 絵画 「大いそ」飯田九一文庫

こよろぎのいそたちならし磯菜摘む
めざし濡らすな沖に居れ浪

【意味】こよろぎの磯を走りまわって、磯の海藻を摘んでいる前髪のかわいい乙女を濡らすな、波よ。沖に居なさい。¹⁸⁾

中世の紀行文『海道記』では、「あはれさびしき空かな、眺め馴やて人は行らん。箱根の山を越えたあとに広がる大磯の景色に感動したが、他の人は慣れてしまっているからもう感動しないのか」と述べている。

大磯や小磯の浦の浦風に
行ともしらずかへる袖かな

【意味】大磯や小磯の浦を吹く風に、私が旅を行くとも知らず翻って後に帰ろうとする衣の袖よ。¹⁹⁾

(六) 鳴立沢―西行

三夕の歌として知られる西行(1118～1190)の歌(後述)とともに有名な鳴立沢には現在も鳴立庵がある。

鳴立庵は、1695(元禄8)年、俳人大淀三千風が入庵して以来、代々俳人が庵主となり、相模俳壇の中心的存在である。

心なき身にもあはれはしられけり

鳴たつ沢の秋の夕暮

(山家集四七〇 西行)

【意味】出家してものの情趣を味わうことを断った身の私のような者にも、しみじみとした趣が自然と感じられたことだ。この鳴の飛び立っていく沢の秋の夕暮れは。²⁰⁾



図6 鳴立庵職員撮影 2016

「鳴立沢」は厳密には地名ではないので歌枕ではないが、和歌をはじめとする伝承や物語によってその名を知られた。「相模国の歌枕名所考」²¹⁾によれば、西行のこの歌によって鳴立沢はできたとの説もあり、歌によって地名に固定した例として興味深い。

例えば『東海道中膝栗毛』(1802～1814年 十返舎一九)で

第二節 霊峰「大山」、相模嶺・相模川

(一) さがむね(相模嶺)

相模国の山々すなわち「相模嶺」という歌枕がある。相模国には足柄、箱根、丹沢などの山々があるが、「相模嶺」が具体的にどの山々を指すのかは不明だという。『萬葉集地名歌総覧』²²⁾は、賀茂真淵の『萬葉考』(1760年)に従い「大山」と考えるべきだとしており、他の論考もそれに倣う。

相模嶺の小峰見かくし忘れ来る

妹が名呼びて吾をねし泣くな

(万葉集卷十四 二二二六二 よみひとしらず)

【意味】相模嶺が小さな頂を隠してしまおうように山のかたに忘れてくる妻の名を呼んで、私を泣かせるな。²³⁾

(二) 大山

「大山」は、厚木・伊勢原・秦野三市にまたがる標高一二四六メートルの峰であり、山頂に雲がかかると雨になるといわれ、周辺の農村では雨降山(あめふりやま、又はあぶりさん)と呼んでさかんに雨乞いがなされた。

大山は阿夫利山とも書かれ、頂上には阿夫利神社があり古くから信仰され、江戸時代には落語の「大山詣り」にみられるように庶民の信仰を集めていた。近代和歌に

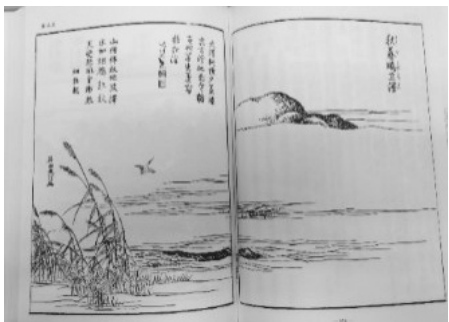


図7 鳴立庵
『東海道名所図会復刻版下巻』
秋里籬島編著 羽衣出版 1999
名所の紹介と共に、その土地に由来する和歌や漢詩などが添えられて紹介されている。

は「大山」の語で読まれている。

大山の据わり豊かに青稲田

広く涯なく空にしまぎる

(「さざれ水」1934(昭和9)年 窪田空穂)

にわかにも阿夫利天狗の風吹き来 大山祇よ何を怒る

(「人間経」1934(昭和9)年 吉井勇)

いくたびか雲にぬれけむ石低し

大山通ひの道しるべひと

(「小紺珠」1948(昭和23)年 宮格)

(三)とやの(等夜乃野)、つむがの(都武賀野)

『万葉東歌の世界』⁽²⁶⁾によれば、「とやのの」は現在の津久井町鳥屋(2006年の市町村合併で相模原市緑区鳥屋に改称)あたり、「つむがの」は愛川町ではないかと推測されており、以下の歌が紹介されている。

等夜の野に兎狙はりをさをさも

寝なへ兎ゆるゑに母にころはへ

(万葉集卷十四 三三二九 よみびとしらず)

【意味】とやのので兎をねらうようにろくに寝ていない。あの娘のことで母親に叱られても(逢いに行く機会を狙っている)。⁽²⁷⁾

「つむがの」の例歌には「上志田」とある。現在の愛

川町にはその字が残り、田野が広がっている。

つむがのに鈴が音聞こゆ上志田の

殿の仲子し鷹狩すらしも

(万葉集卷十四 三四三八 よみびとしらず)

【意味】つむがのに鈴の音が聞こえる。上志田の殿の次男が鷹狩をするらしいよ。⁽²⁸⁾

いづれも、現在では名所として知られている地名というわけではなく、『万葉集』に見られても後世にも受け継がれぬまま、今やどこを指すのかもわからなくなりました。このようにもはや辿れぬ過去の景勝地も多々あり、今後の研究によって発見される可能性も残されているが、幻の歌枕とでも言うべき地名がある。

同じ県央地区には「相模川」があり、国土交通省のホームページ「全国の109の1級水系にまつわる和歌・俳句一覽」に神奈川県川として名前が出ている。そこには次の歌が紹介されている。

夕月夜さすや川瀬の水馴れ柳

なれてもうとき波の音かな

(金槐和歌集 六三五 源実朝)

【意味】夕月夜に川瀬を行く舟、その舟の棹が水によくなじんでいるように、波の音は聞きなれているのだがそれでもやはり疎ましくてならない。⁽²⁹⁾

第三節 歌と観光・江ノ島・鎌倉・横須賀

(一) 江ノ島

現在でも観光地として賑わう江ノ島は鎌倉時代以降、名所として知られるようになった。江の島神社への信仰も和歌に詠まれ、例えば『海道記』には次のような一首がある。

江ノ島やさして塩路に跡たるる

神は誓の深きなるべし

(海道記 作者未詳)

【意味】神が特にこの海の中の江の島と決めて仮の姿で現れたのは、衆生を救おうという誓願が海のように深いからだろう。⁽³⁰⁾

また、近代和歌には次のような歌がある。



図8 江の島
『日本名勝図會江の島』
松木平吉 1896

(二) 星月夜の井と鎌倉山

江の島へ通ふ海原路絶えて

みちくる春の汐の上の雨

(「竹の里歌」1904(明治37)年 正岡子規)

岩戸いでて青海原をみさくれば我も神代の神「こちする

(「紫」1901(明治34)年 与謝野鉄幹)

【意味】「星月夜の井」は「鎌倉」を導く枕詞とされ、その美しい名には数々の和歌と伝説が残されている。以下に『東海道名所図会』(前掲)の記述を引用する。

「我ひとり鎌倉山を越へ行けば

星月夜こそうれしかりけれ

後堀川百首北国紀行

極楽寺へいたるほどに、いとくらしき山間に星月夜と云所あり。昔此道に星御堂とて侍りきなど、古き僧の申し侍りしかば、歌に、

今もなを星月夜こそ残るらめ寺なきたにの闇の灯」

【意味】今も星明りの夜が残っているであろう。寺はなくなつた谷の闇の中でも灯火となつて。⁽³¹⁾

「星月夜の井」には、「あるとき近所の女が誤つて菜刀を井戸に落としてしまつてからは星影が消滅した」という伝説が残されている。⁽³²⁾。そのため、闇が深いと表現さ

れるようだ。ちなみに、この歌枕により、鎌倉市の旧徽章は星月夜がモチーフにされていた。『都市の紋章』⁽³³⁾によれば、星月夜の名の由来は「其昔し井中を窺ふと星影涼しげに映つて居たので」と説明されている。(図9) 鉄道唱歌にも「星月夜」は歌われている。以下にその部分を引用する⁽³⁴⁾。

「北は円覚建長寺 南は大仏星月夜 片瀬腰越江の島も ただ半日の道ぞかし」。

他にも、「鎌倉山」や「鎌倉」という語がそのまま詠まれる歌も多くあり、鎌倉という地名は今も昔も名所として知られていることが分かる。

薪こる鎌倉山の木垂る木を

まつと汝が言はば恋ひつつやあらむ

(万葉集卷十四 三四三三 よみびとしらず)

【意味】薪として刈ってきた鎌倉山の繁茂した木を松だというのなら、そしてお前が待つというのなら私はこんなに恋に苦しんでいようか。⁽³⁵⁾

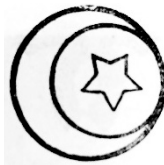


図9 鎌倉旧徽章『都市の紋章』(前掲)

峰の、松の梢にまで雪が積もっている。これでは鶴と白雪の見分けがつきはしない。⁽³⁷⁾

水色の鎌倉山の秋かぜに

銀杏ちりしく石のきざはし

(佐佐木信綱編『和歌名所めぐり』より)

与謝野寛(前出与謝野鉄幹の本人)

次の中世の紀行文『北国紀行』(1487年法印堯恵)の歌は、

「雪ノ下」を巧みに詠みこんだ惜春の歌である。

春深き跡哀れなる苦の上の花に残れる雪の下道

【意味】春も深くなったこの証跡は趣のあることだ。苔上に散った花吹雪の残る雪の下道よ。⁽³⁸⁾

(四) みんなのせがは

万葉集に歌われた「みんなのせがは」は、由比ヶ浜にそそぎ、現在は稲瀬川と呼ばれているところで、歌舞伎の「白浪五人男 稲瀬川勢揃場」(河竹黙阿弥)の舞台にもなった。大きな川ではないが、中世の歌学書『五代集歌枕』(100年代藤原範兼)の「川」の項にも登場する。稲瀬川の河口には碑が立っており、北条政子が鎌倉に入る際にこの川辺の民家に逗留したことや、新田義貞軍の大將大館宗氏はこの川で討死したなど、有名な物語も少なくない旨が書かれている。この碑に書かれているよう

ここで「薪こる」は「鎌」にかかる枕詞であり、柴刈りに鎌を用いるからであろう。また、「まつ」は「松」と「待つ」の掛詞である。

また、現代短歌にも「鎌倉山」は詠まれている。

鎌倉の山あひ日だまり冬ぬくみ

摘むにゆたけき七草なづな

(「みかんの木」所収「李青集」1925(大正14)年

木下利玄)

鎌倉の五山の鐘の此処に来て

響き合ふなる松原の家

(「白桜集」1942(昭和17)年 与謝野晶子)

(三) 鶴岡

鎌倉市雪ノ下の鶴岡八幡宮は、和歌の世界でも古くから読み継がれてきた。歌人としても知られる三代将軍源実朝暗殺の際に甥の公暁が隠れていたとされる石段途中の大銀杏は強風で倒れるまで人々に親しまれており、その懐かしい資料も多く残っている。⁽³⁶⁾

鶴の岡あふぎて見ればみねの松

梢はるかに雪ぞつもれる

(金槐和歌集 三三三源実朝)

【意味】鶴岡八幡宮を振り仰いでみると、はるか彼方の

に、歌のイメージと深く結びついて知られるようになった地名と言えそう。ただし、鎌倉時代の物語には既に「稲瀬川」の名が残っていたことを考えると、「美奈の瀬川」の名はいっしょに失われ名を変えて「稲瀬川」として知られていく歌枕ということになる。

ま愛しみさ寝に吾は行く

鎌倉の美奈の瀬川に潮満つなむか

(万葉集三三六六 よみびとしらず)

【意味】心からいとしく思っ、私は共寝に出かける。鎌倉の美奈の瀬川は、潮が満ちているだろうか。⁽³⁹⁾

(五) 三浦崎

東海道管轄下の上総、下総、常陸の国々への往来には、三浦半島の走水(横須賀市)から海を渡ったという。そのため、「三浦崎」は走水あたりをはじめとした三浦半島の海浜一帯を指すようだ。

次に挙げる歌は、純情な相模国の恋の歌として知られていたものである。

芝付きの三浦崎なるねつこ草

相見ずあらば吾恋ひめやも

(万葉集卷十四 二五〇八 よみびとしらず)

【意味】芝付の三浦崎に群生する翁草が根付くように寝

た。もし寝ることもなかったら、こんなに恋しくはないものを。^④

他、神奈川にゆかりある歌人たちの歌を紹介する。

ほくほくとけふも三崎へのぼり馬

栗畑こえていななきにけり

〔あらたま〕1921(大正10)年 齋藤茂吉

潮引きて崎のするどくなりまさり

朝あをあをと松野風吹く

〔死か芸術か〕1912(大正元)年 若山牧水

見桃寺の鶏長鳴けりはるばると

それにくたふるはいづこの鶏

〔雲母集〕1915(大正3)年 北原白秋

「相模の海」という語は、大磯の付近から湘南のあたり、三浦半島の相模湾沿いまでを指し、広く歌われている。よってここで数首紹介する。

風強くいなさをふけばみるかぎり

空に波たつ相模の海は

〔生くる日に〕1914(大正3)年 前田夕暮

夏はきぬ相模の海の南風に

わが瞳燃ゆわがこころ燃ゆ

〔酒ほがひ〕1910(明治43)年 吉井勇

詩人の堀口大学(1892-1981)は、戦後疎開先から温暖な

葉山へ移り住み、以来、八十九歳で亡くなるまで暮らしたことで、葉山にゆかりある詩人として知られている。

森戸の夕照

夕焼けや森戸の浜の富士高く

〔虹消えず〕堀口大学

第四節 万葉から近代へ・川崎・横浜

(一) 多摩川・多摩の横山

『萬葉集地名歌総覧』^④によれば、武蔵国府が多摩川北岸の現府中市に置かれており、多摩川は国府付近を流れる川として知られていたと考えられる。

次の歌は、武蔵野国の防人の妻が詠んだ歌である。

多摩川にさらす手づくりさらさら

何そこのここのこかなしき

〔万葉集卷十四 二二七三 よみびとしらさず〕

多摩川にさらす手作りの布のように、さらさらにとどろいてこの子がこれほどいとしいのだろう。^④

【意味】多摩川にさらす手作りの布のように、さらさらにとどろいてこの子がこれほどいとしいのだろう。^④多摩川のあたりは特に馬と密接な関係があったようで、次の歌は徒歩で行かねばならない夫を案じる歌である。防人として九州へ行く行程には諸説があるが、いまの小田急沿いを南下して、「当時相模の国府があつたとされる海老名のあたりまで向かう」^④と解釈される。『や

さしい川崎の歴史』^④では、「国道二四六号とよばれている東京沼津線ぞいに原町田↓海老名↓伊勢原↓国府津↓関本↓足柄峠を通過して駿河の国から奈良地方へと歩」いたとある。

赤駒を山野に放し捕りかにて

多摩の横山徒歩ゆか遣らむ

〔万葉集卷二十 四四一七 宇遲部黒女〕

【意味】赤駒を山野の中に放牧して捕えられず、夫に多摩の横山を歩かせてしまうのだろうか。^④

(二) 川崎―東海道の宿場町、門前町、そして工業都市

東海道の宿場町として知られていた川崎は、川崎大師の門前町としてにぎわっていた。ここでは、誹風柳多留所収の川柳を紹介する。

大師河原へ行ったあと女房逃げ

〔誹風柳多留 十三 8〕

御尊体生木の護摩に御落涙

〔誹風柳多留 一二二 11 其成〕

明治以降は東京と横浜には生まれ、かつ東京湾に面した地の利を得て急速に工業都市化した。北部の多摩川岸一帯では梨の栽培が盛んだったということが分かる歌

がある。

川崎に住みて恋しき赤梨の

長十郎も世にすたれたり

〔月華の節〕1988(昭和63)年 馬場あき子

労働者の街ゆゑタレの塩味が強し

川崎のそばもラーメンも

〔雲に紛れず〕1985(昭和60)年 真鍋正男

(三) 横濱

和歌に詠まれる横浜のイメージはやはり、一八五四年にペリー艦隊が来航した異国情緒溢れる港町である。

横濱に錨おろせるペリリにかはりてよめる

武蔵の海さしいづる月は天飛ぶや

かりほるにやに残る影かも

〔佐佐木信綱編『和歌名所めぐり』より〕

佐久間象山(1811-1864年)

保土ヶ谷の高处に見ゆる家群は

イタリアの国ゆるけるに似たり

〔寒雲〕1940(昭和15)年 齋藤茂吉

他にも、江戸時代の浮世絵や紀行文には金沢八景、金沢文庫なども登場し、歴史の地、景勝地として多くの人びとに愛される景色も横濱にはあったといえる。

相		模		国	
歌枕	例	歌	作者	奥撰	原歌
秋名の山 あきのやま	足利のおきな山に引く舟のしりひかしもよこば子がたに		よみびとしらす 五代集上		足柄峠
足柄 あしがら	あしがらの箱根の山に粟蒔きて実とはなれるを逢はなくも怪し		よみびとしらす 夫木廿		南足柄市、山北、松田、開成、大井、 中井、小田原市、箱根、真鶴、湯河原
足柄小舟 あしがらこぶね	百つ鳥あしがら小舟歩き多みなこそ離るらめ心は思へど		よみびとしらす 夫木三十三		南足柄市 足柄山産の杉で作つた小舟
足柄下郡 あしがらしたごほ	八十国は難波に集ひ船飾吾がせむ日ろを見も人もがも		よみびとしらす 万葉集廿		小田原市、箱根、真鶴、湯河原
足柄の御坂 あしがらみさか	あしがらの御坂かきこみ曇夜の吾が下そへをうち出づるかも		よみびとしらす 五代上	万葉集 3388 3371	南足柄市 足柄峠の難所
足柄の懸路 あしがらかけぢ	春霞山立ち越えばあしがらの懸路の雲も稀にこそ見ぬ		民部卿兼歌師 夫木廿		足柄峠の道にかけられた懸路 (木材を組んだ懸路)
足柄の関 あしがらせき	あしがらの関の山辺を行く人は知るも知らぬも疎からぬかな		真神法師 五代下	後撰集 1361 1362	南足柄市
足柄の関の八重山 あしがらせきのやま	あしがらの八重山越えていましては離れをか見つつ君と離ばん		よみびとしらす 名寄廿		南足柄市
足柄の関路 あしがらせきのみち	あしがらの関路越え行く東雲に一群雁む浮鳥が原		後京極親政 名寄廿	新勅撰集 1299 1301	南足柄市
足柄の袖 あしがらそで	※歌学書「薬塩」四50下にある 袖は材木のこと				南足柄市
足柄の峰、山 あしがらみねやま	鳥籠(とぶさ)立つ足がら山に船木きり木にきり寄せつあたら船きを		よみびとしらす 五代上	万葉集 394 391	南足柄市
足柄の嶺ろ あしがらみね	置く露に枯れにけらしなあしがらの嶺ろに繁れる和(に)こ草もなし		衣笠内大臣 名寄廿	衣笠内大臣 787	箱根の嶺ろの誤り
足柄の山路 あしがらみち	あしがらの山路の嵐夜を寒み鹿の首鹿き竹の下露		参議為相卿 夫木十二	藤谷集 145	南足柄市
足柄の湯 あしがらゆ	あしがりの土肥の河内に出づる湯の世にもたらに子らが言はななくに		よみびとしらす 五代下	万葉集 3385 3368	湯河原町・真鶴町

図11 かながわ歌枕一覧 1頁(筆者作成)

かながわ歌枕一覧

出典『和歌の歌枕・地名大辞典』吉原栄徳、おうふう、二〇〇八
※：例歌なし 歌学書等に歌枕として紹介されている。

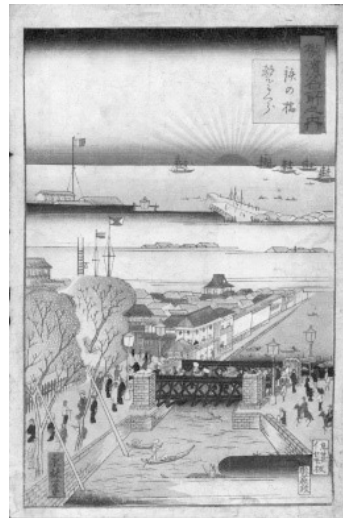


図10 『横濱名所之内鐵の橋朝ざくら』 永林 1872

金川にちりしく秋のいろはかな
 (『東海道名所記』1659年頃より 浅井了以)
 『東海道名所記』は江戸時代の仮名草子であり、実際の旅行ではなく創作ではあるが、江戸から都を目指す道中で名所旧跡を巡りながら狂歌や俳諧を詠んでいる。

おわりに
 私が所属する企画協力課は県内市町村図書館等との相互貸借、連携事業を担当している。協力車が各市町村図書館を巡回し、資料の運搬だけでなく司書が同乗して情報交換をしている。このことが、本展示の発案のきっかけにもなった。各々の図書館、そしてその地域の取組を伝え、魅力を発見していくこの仕事は、歌枕の再発見と伝承に似ているのではないか。
 今回の展示および本稿の執筆にあたり、多くの資料を参考にした。紙幅の都合上取り上げることのできなかつた和歌や作品、また、それぞれの歌枕についても書ききれず言葉足らずであることも多い。文末の展示資料および参考文献リストを参照されたい。

相		模		国		
歌枕	例	歌	作者	典拠		
諸越の里 あつし ついで	東路のもろこしの里織りて綾つ衣をや韓の衣と言ふらん		人丸	三十一 14816	人丸集 270	平塚市
方見の浜 かたみ はま	恋しさの慰むやとて逢ふまではいざやかたみの浜にかも寝ん		よみびとしらず	夫木廿五 11769		平塚市
日向山 ひなた やま	指して来しひなたの山を頼む身は目も明らにと見えざらめやは		相模	夫木廿 8947	相模集 525	伊勢原市日向 日向薬師
御嶽山 みづたけ やま	古の吉野を移すみたけ山金(こがね)の花もさこそ咲くらめ		前大徳正五郎弁	夫木三十四 16070		大山
相模嶺 さまみね	さがみ嶺の小櫓見返(そ)くし忘れ来る妹が名呼びて我を音しなくを		よみびとしらず	五代上 564	万葉集 3378 3362	大山
雨降山 あめふり やま	立ち寄れど雨降山の木の本は頼む効(かひ)なく思ほゆるかな		坂上郎女	五代下 8775	万葉集 690 687	伊勢原・栗野大山
早川 はやがわ	愛(うつく)しと我が思ふ心はやはかのせくとせともなをや崩れん		衣笠内大臣	夫木廿一 1396		小田原市早川
小櫓の橋 こしらのばし	仮初めに見しばかりなるはしたかのをぶさの橋のひや渡らん		萬葉集	9422		小田原市鴨宮 酒匂川にかかっていた橋か
小余綾の浜 こよあやぎのはま	相模路の余綾(よろぎ)のはまの真砂子(まなご)なす子らはかなしく思はるるかも			3389 3372		小田原市国府津から二宮町
ゆるぎの浦 ゆるぎのうら	※歌学書「能因」94にあり					大磯町
小余綾の浦 こよあやぎのうら	こゆるぎの浦に風の吹しからくだものこさず浪も寄せけり		よみびとしらず	松葉十	元真集 106	大磯町
小余綾の磯 こよあやぎのいそ	陸奥は世を浮島も有といへば関こゆるぎのいそがざらなん		小町	名寄廿	続千載集 758 762	大磯町
小余綾の磯 こよあやぎのいそ	玉垂れのこがめやいづらこよろぎの磯の波分け沖に出でにけり		敏行	五代下 1633	万葉集 3389 3372	大磯町
小余綾の海人 こよあやぎのうらひと	鶴も住み松も生ひたるこゆるぎの磯のあまさへ千世をこそ折れ		能宣朝臣	夫木廿三 12066	能宣集 477	大磯町
小余綾 こよあやぎ	岩が根の磯の初草下前えて寄すれば青きこよろぎの波		参籠為相脚	夫木二 623	藤谷集 41	大磯町
恋その浜 こひそのはま	※歌学書「八雲」にあり				栗原抄抄 347	大磯町「小櫓の浜」
小櫓の浦 こしらのうら	大磯やこいその浦の浦風に行(ゆく)とも知らず返る袖かな		よみびとしらず	名寄廿		大磯町大磯

図11-3 かながわ歌枕一覧 3頁(筆者作成)

相		模		国		
歌枕	例	歌	作者	典拠		
大磯の浜 おほいそ はま	松の木立浪越す岩の気色までけに見所はおほいその浜		参籠為相脚	夫木廿五 11806	藤谷集 293	大磯町
大磯 おほいそ	おほいそに朝な夕なに漕(かづ)きぬる海人も我がごと袖や濡るらん		仲実朝臣	夫木廿六 12081	永久百首 654	大磯町
余綾の浜 よろぎのはま	相模路のよろぎの浜の真砂なす子らは愛(かな)しく思はるるかも		よみびとしらず	五代下 1561	万葉集 3389 3372	大磯町・小田原
土肥の河内 とひのこうち	足柄(あしがじ)のとひ河内に出づる湯のよにも船よらに子らが言はなくに		よみびとしらず	五代下 1729	万葉集 3385 3368	湯河原町・真鶴町
和乎可鷗山 わとよかおうやま	足柄(あしがじ)のわかか山のかづの木の我をかづさねもかづさかずとも		よみびとしらず	五代上 468	万葉集 3451 3432	箱根 声ノ湖近辺の山
浦坂 うらさか	東路のゆさかか越えて見渡せば塩水流るる早川の水		安喜門院四衆	夫木廿四 10943	十六夜日記	箱根 鎌倉街道の一 湯元温泉へ続く
前川 まへがわ	浜辺なるまへの川瀬を行く水の早くも今日の暮れにけるかな		鎌倉右大臣	夫木廿四 11148	金かい集 702	小田原市前川
二子の山 ふたごのやま	箱根山ふたごの山の秋深み明暮風に木の葉散りかふ		好忠	夫木廿 8643	好忠集 268	箱根 声ノ湖東二子山と下二子山
箱根路 はこねち	はこねちや山風そよへ笹竹のしに乱れて霰降るらし		安喜門院四衆	夫木廿八 13271		箱根
箱根の磯 はこねのいそ	足柄のはこねの山に粟降きて突とはなれるを逢はなくも奇(あや)し		よみびとしらず	五代上 466		箱根
箱根 はこね	玉くしげはこねの海はけけえあれや二国かけて中にたゆたふ		鎌倉右大臣	夫木廿三 10309	金かい集 697	箱根
可鷗山 かおうやま	旅衣紐ゆふかけて足柄のはこね飛越え履ぞ鳴くなる		光朝卿入道重原	夫木十二 4872	万代集 908	箱根
声の海 あしうみ	足柄(あしがじ)の表を可鷗山の敷(かご)の木の我をかづさねもかづさかずとも		さがみうた	万葉集十四 3451 3452		箱根 声ノ湖近辺の山か
葦川 あしがわ	今よりは思ひ乱れしあしの海の深き意みを神に任せて		源光行	夫木廿三 10377	東関紀行	箱根 声ノ湖
麻万の小菅 あまのこすげ	一夜とも宿をば変へず数多度立ち寄りて見るあし川の波		参籠為相脚	夫木廿四 11180	藤谷集 294	箱根 声ノ湖湯温泉
関の八重山 せきのかやま	※歌学書「葉道」四46下にあり		よみびとしらず	夫木廿八 13537	万葉集 3386 3369	南足柄市壺下
						足柄

図11-2 かながわ歌枕一覧 2頁(筆者作成)

相		模		国	
歌枕	例歌	作者	典拠	原歌	現在地
相模	相模なるたちの山のたちまに君に逢はんと思はざりしを	よみびとしらす 夫木廿	8425	枕詞的地名 相模川	神奈川県相模川
相模の池	布さらすこれやさがみの池ならん笹分衣脱ぎも替えばや	四條宮下野 夫木廿三	10826	相模湾に面した海浜部	神奈川県相模湾
相模の市	布さらすこれやさがみの市ならん笹分衣脱ぎも替えばや	四條太皇太后宮下野 夫木三十一	14877	高座郡あたりか	神奈川県高座郡
相模路	さがみ路の余波の涙の真砂なす子らは悲しく思はるるかも	外集三 万葉集	253 (6)	鎌倉街道か	神奈川県鎌倉市
相模川	※歌学書「能因」にある				
相模の小野	さねさしさがむの小野に燃ゆる火の火中（ほなか）に立ちて問ひし君はも	弟橋姫	427 (3)	鎌倉市小野の説もあり	神奈川県鎌倉市
小山田の里	小山田の里の早苗の早苗兼（さなぼ）りに小川に通ぐる木の下にして	よみびとしらす 夫木三十一	14591	厚木市小野の説もあり	神奈川県厚木市
小山田の関	逢ふ事は調代（なほしろ）水に任せてぞ越さん越させしはを山田の関	よみびとしらす 夫木廿一	9533	古事記	神奈川県厚木市
宇奈比	夏麻引き（なつそびく）うないを指して飛ぶ鳥の至らんとそよあかのしはふし	よみびとしらす 名寄廿一	3135	万葉集	神奈川県宇奈比

図 11-5
かながわ歌枕
一覧 5頁
(筆者作成)

相		模		国	
歌枕	例歌	作者	典拠	原歌	現在地
諸越の原	名に負はば虎や伏すらん東路にたつと言ふなるもろこしが原	藤原忠房	夫木廿二	永久百首	平塚市
江の島	江の島やさして塩路に跡垂るる神は誓ひの深きなるべし	不明	名寄廿	530	藤沢市江の島
片瀬川	うち渡す今や潮干のかたせ河思ひしよりも浅き水かな	参議為相卿	夫木廿四	藤沢市片瀬川	神奈川県藤沢市
砥上げ原	しはまつの葛の茂みに妻籠めてとがみが原に雄鹿鳴くなり	西行	名寄廿	歌集	藤沢市鶴沼海岸
八松	やつまつ八千世の影に面馴れて砥上げ原は色も変らじ	長明	名寄廿	海道記	藤沢市辻堂
田津の浦	※証歌がないので不明 歌学書「能因」にある				
鎌倉	かまくらの見越しの崎の岩崩（いわくえ）の君が悔ゆべき心は持たじ	よみびとしらす	五代下	万葉集	鎌倉市藤沢市戸塚区泉区
鎌倉の郡	東路や数多のこほりのその中にかでかまくら栄え切めけむ	中務卿の親王	夫木三十		鎌倉市藤沢市戸塚区泉区
鎌倉の里	昔にもたちこそ勝れ民の戸の煙賑ふかまくらの里	藤原基政	夫木三十一		鎌倉市小町・大町・材木座
鎌倉山	薪こるかまくら山の本垂る木をまつと汝（な）が言はば悲ひつつやあらん	よみびとしらす	五代上	万葉集	鎌倉市雪ノ下
鶴が岡	つるがをか仰ぐ翼の助けにて玉垣に移れ宿の鶴	為実朝臣	夫木廿一		鎌倉市
星月夜	我一人鎌倉山を越行けば星月夜こそ嬉しかりけれ	常陸	松葉二	永久百首	鎌倉市坂ノ下
御輿の嶺	鎌倉のみこしの崎の岩崩（く）えの君が悔ゆべき心は持たじ	よみびとしらす	五代下	万葉集	鎌倉市稲村万崎
みな瀬川	鎌倉やみこしがたけに雪消えて水無瀬川に水まさるなり	顯仲	松葉四	堀河百首	鎌倉市長谷
三浦崎	ま愛（かな）しみさ寝に我は行く鎌倉のみなせがに潮満つらむか	よみびとしらす	五代下	万葉集	鎌倉市
三浦の里	芝付のみうら崎なるねつこ草相見すあらば吾恋ひめやも	よみびとしらす	五代下	万葉集	鎌倉市
三崎	我が心遠江の浜名よりみうらの里の妹がりぞ行く	源仲正	廿一 夫木	万葉集	鎌倉市
	磯の松幾ひささにか成ぬらいたく木高き風の音かな	鎌倉右大臣	松葉三	2191 2183	鎌倉市三崎町

図 11-4 かながわ歌枕一覧 4頁 (筆者作成)

歌枕	例歌	作者	奥書	原歌	所在地
櫛櫛の郡 <small>（たがひら）</small>	家（いば）るには篝火（あしふ）焚けども住みよけを筑紫に至りて恋しけもはも	よみびとしらす	万葉集廿	川崎・横浜の各市	
多摩川の里 <small>（たまとの）</small>	たま川に晒す手作りさらさらならに何ぞこの頃ここだ愛しき	よみびとしらす	4443 4419	川崎	
多摩川の里 <small>（たまとの）</small>	手づくりやささらす垣根の朝露を貫き止むる玉川の里	前中納言定房	1370	万葉集	川崎
秋の浦 <small>（あきのうら）</small>	なびきこしたもとのうらのかひしあらば千鳥の跡を絶えず訪はなん	よみびとしらす	11467	建保名所 百首	多摩川流域の村里
秋の小野 <small>（あきののの）</small>	降る雨を涙と見てや老いらくのたもとの小野に秋は来ぬらん	夫木廿五	9696	多摩川に沿った地域	多摩川に沿った地域
都筑の郡 <small>（つづきの）</small>	武蔵野のつづきの郡つづきつづき各千代を思ふべらなり	後九条内大臣	14523	能重集	川崎市麻生区
都筑の原 <small>（つづきの）</small>	武蔵野の草の縁も防ひ侘ぬつづきの原の雪の夕暮	法橋顯昭	9881	千五百番 歌合	川崎市緑区・旭区・都筑区
古妻 <small>（ふるつま）</small>	橋の古妻の放髪（はな）り 思ふなむ心うつくしいで吾れは行かな	よみびとしらす	3517 3496	後撰集	川崎市・横浜市だが、 川崎市の西方かという（？）
立野の駒 <small>（たのこま）</small>	秋霧のたちの駒をひく時は心に乗りて君ぞ恋しき	忠房	750	の横濱市 立野にあった立野の牧	横浜市
立野の野原 <small>（たのの）</small>	さおしか（小牡鹿）のたちの原のはぢ紅葉声かわくまで吹く嵐かな	権僧正公朝	4850	横濱市	横濱市
立野の牧 <small>（たのの）</small>	はるばるとたちのの牧にひく駒の泥（な）づ ます越えぬ逢坂の関	正三位季経房	10111	横濱市	横濱市
立野の山 <small>（たのの）</small>	相模なるたちの山のたちまちに君に逢はんと思はざりしを	よみびとしらす	8425	横濱市港北区	横濱市港北区
箱の池 <small>（はこいけ）</small>	冬深みはこの池辺を朝行けば水りの鱧見ぬ人ぞなき	智經法師	10746	横濱市内と考えられる 武蔵国久良郡内	横濱市内と考えられる 武蔵国久良郡内
二俣川 <small>（ふたまたがは）</small>	しづの女（め）が東（あずま） 絡げの麻衣ふたまた川しざぞ渡るらん	信実朝臣	15567	新撰六帖	横浜市旭区

図 11-6
かながわ歌枕
一覧 6頁
(筆者作成)

注及び引用・参考文献

- (1) 吉原栄徳、和歌の歌枕・地名大辞典、おうふう、二〇〇八、全三二四頁。
- (2) 馬場あき子、歌枕をたずねて、角川書店、一九八一、全一九〇頁。
- (3) 樋口和也、萬葉集地名歌総覧、近代文芸社、一九九六、全六八〇頁。
- (4) 出典参考：荻原浅男校注、完訳日本の古典第一巻 古事記、小学館、一九八三、全三七四頁。
- (5) 内藤弘作、枕詞便覧、早稲田出版、二〇〇八、全五一八頁。
- (6) 出典：新日本古典文学大系2 萬葉集二、岩波書店、二〇〇〇、全五八八頁。
- (7) 前掲(3) 萬葉集地名歌総覧
- (8) 出典：新日本古典文学大系1 萬葉集一、岩波書店、一九九九、全五七〇頁。
- (9) 木村尚志、中世の旅の歌枕と東国、東京大学国文学論集、二〇一〇、五号。
- (10) 参考：和歌文学大系58 拾玉集、明治書院、二〇〇八、全五四二頁。
- (11) 出典：新潮日本古典集成46 金槐和歌集、新潮社、一九八一、全三二七頁。
- (12) 出典：築瀨一雄、十六夜日記・夜の鶴注釈、和泉書院、一九八六、全四八三頁。
- (13) 参考：新編日本古典文学全集71 松尾芭蕉集二、小学館、一九九七、全六三〇頁。
- (14) 出典：武内はる恵ほか、相模集全釈、風間書房、一九九一、全六三二頁。
- (15) 出典：新日本古典文学大系51 中世日記紀行集、岩波書店、一九九〇、全五六九頁。
- (16) 参考：新日本古典文学大系3 萬葉集二、岩波書店、二〇〇二、全四九五頁。
- (17) 前掲(3) 萬葉集地名歌総覧
- (18) 参考：新編日本古典文学全集 古今和歌集、小学館、一九九四、全五九〇頁。
- (19) 出典：前掲(15) 新日本古典文学大系51
- (20) 参考：和歌文学大系21 山家集／聞書集／残集、明治書院、二〇〇三、全五七四頁。
- (21) 佐佐木忠慧、相模国の歌枕名所考、宮城学院女子大学研究論文集、一九八九、七〇号、六五―九三頁。
- (22) 倉本一宏、「旅」の誕生、河出書房新社、二〇一五、全三三〇頁。

- (23) 出典参考：杉本苑子・現代語訳日本の古典21 東海道中膝栗毛・学習研究社、一九八〇、全一七六頁、
- (24) 前掲(3) 萬葉集地名歌総覧
- (25) 出典：中西進、万葉集 全訳注原文付、講談社、一九八四、全二五三四頁、
- (26) 長谷章久、万葉東歌の世界、講談社、一九七七、全二三三頁、
- (27) 出典参考：日本古典文学全集4 萬葉集三、小学館、一九七六、全五四九頁、
- (28) 出典参考：前掲(27) 日本古典文学全集4
- (29) 出典：前掲(11) 新潮日本古典集成46
- (30) 出典：前掲(15) 新日本古典文学大系51
- (31) 出典：前掲(15) 新日本古典文学大系51
- (32) 嶋津聿史、万葉東歌地名考、桜風社、一九八二、全一八五頁、(国語国文学研究叢書 第三卷)、
- (33) 近藤春夫、都市の紋章、行水社、一九一五、全一九〇頁、
- (34) 地理教育鉄道唱歌1、国書刊行会、一九八七、全三三頁、
- (35) 出典：前掲(25) 万葉集 全訳注原文付
- (36) 永井路子、カラー鎌倉の魅力、淡交社、一九七三、全一〇三頁、他

- (37) 出典：前掲(11) 新潮日本古典集成46
- (38) 出典：前掲(15) 新日本古典文学大系51
- (39) 出典：前掲(25) 万葉集 全訳注原文付
- (40) 出典：前掲(25) 万葉集 全訳注原文付
- (41) 前掲(3) 萬葉集地名歌総覧
- (42) 出典参考：前掲(16) 新日本古典文学大系3
- (43) 中西進、万葉百景 下、平凡社、一九八六、全二二二頁、
- (44) 小塚光治編、やさしい川崎の歴史、教育出版、一九七〇、全三四頁、
- (45) 出典：前掲(25) 万葉集 全訳注原文付

展示資料

- ・中西進、万葉の風景下、平凡社、一九八六、全二二二頁、
- ・日本古典文学会編、複製日本古典文学館22-1 東急記念文庫蔵枕草子上、日本古典文学刊行会、一九七四、全一冊、
- ・橋本不美男・杉谷寿郎・小久保崇明、更級日記翻刻・校注・影印、笠間書院、一九八〇、全三五〇頁、
- ・長谷小章久、和歌のふるさと 歌枕をたずねて、大修館書店、一九九〇、全一六六頁、
- ・日本の湖沼と溪谷7、ぎょうせい、一九八七、

- 全一七五頁、
- ・中野三允、箱根全山蟬の連歌や宗祇が忌三允〔短冊〕
- ・秋里離島編、東海道名所圖會第2、吉川弘文館、一九一〇、全一〇二頁、
- ・山と溪谷社、伊豆・箱根、山と溪谷社、二〇〇一、全三九九頁、
- ・毎日新聞社、街道紀行第二卷 関東路、毎日新聞社、一九九一、全一五四頁、
- ・鈴木恒男、万葉の歌碑を訪ねて、アムリタ書房、一九八七、全四九五頁、
- ・日本古典文学会、複製日本古典文学館2-12 宮本長則氏蔵清輔本古今和歌集卷11-20、日本古典文学刊行会、一九七三、全一冊、
- ・歌川広重、広重保永堂版「東海道五拾三次」帰国展、毎日新聞社、一九九四、全一冊、
- ・短歌研究、二〇〇九、六六卷九号、短歌研究社、
- ・岡本一平、一平全集第九卷、大空社、一九九〇、全四二四頁、
- ・池田永治、肉筆東海道五十三次漫画絵巻より「大磯」、長良川画廊 Web 書画ミュージアム、
- ・神奈川県立図書館、飯田九一文庫目録 ― 地域資料、

- 主題別解説目録― 神奈川県立図書館 二〇一〇、全一九九頁、
- ・中田嘉種解説、原色再現東海道五十三次宿場町百景、新人物往来社、二〇一〇、全一五九頁、
- ・心蔵、大堂不動明王御由来記、植木弥一、一九〇〇、馬場あき子、佐佐木幸綱監修、新撰歌枕2 現代短歌集成、第一法規出版、一九九〇、全二一八頁、
- ・長谷章久、万葉東歌の世界、講談社、一九七七、全一三三頁、
- ・神奈川近世史研究会編、江戸時代の神奈川 古絵図でみる風景、有隣堂、一九九四、全一〇八頁、
- ・山田一廣、かながわ景勝の旅、神奈川新聞社、一九九二、全一八四頁、
- ・清永安雄撮影、東海道五十三次写真紀行、産業編集センター、二〇一四、全二六三頁、
- ・鎌倉歌壇、かまくら歌枕、冬花社、二〇一一、全一五五頁、
- ・福田アジオ、名所図会を手にして、御茶の水書房、二〇一一、全二一六頁、(東海道神奈川大学評論ブックレット31)、
- ・永井路子文・丸茂慎一写真、カラー鎌倉の魅力、淡交社、一九七三、全一〇三頁、

- ・地理教育鉄道唱歌1. 国書刊行会、一九八七、全三三頁。
- ・鉄道省編、新鉄道唱歌 第1集、国書刊行会、一九八七、全一冊。
- ・近藤春夫、都市の紋章、行水社、一九一五、全一九〇頁。
- ・山と溪谷社、鎌倉、江の島、三浦半島、山と溪谷社、二〇〇一、全三三三頁。
- ・尾崎左永子、「鎌倉百人一首」を歩く、集英社、二〇〇八、全三三三頁。
- ・短歌研究、二〇一三、七〇巻六号、短歌研究社、短歌研究、二〇一一、六八巻六号、短歌研究社、羽生槇子、詩集江ノ島電鉄 鎌倉高校前の海、武蔵野書房、二〇〇六、全五八頁。
- ・小林清親、日本名勝図會江の島、松木平吉、一八九六、歌川広重、諸國名所百景相州七里ヶ濱、魚榮、一八五九、
- ・渡部まなぶ、日本の山河 34 神奈川、国書刊行会、一九七八、全九〇頁。
- ・阪田正幸、かながわの景勝、神奈川合同出版、一九七九、全一七四頁。
- ・神奈川県商工部商業観光課、かながわの景勝50選絵画集、神奈川県商工部商業観光課、一九八二、全一冊。
- ・短歌研究、二〇〇八、六五巻八号、短歌研究社、
- ・檜崎宗重編、北齋と廣重2 東海道五十三次、講談社、一九七一、全一四〇頁。
- ・秋里離島編著、東海道名所図會 下巻、羽衣出版、一九九九、全四四〇頁。
- ・短歌研究、二〇一一、六八巻一、短歌研究社、至文書編集部編、川柳江戸名所図會、至文堂、一九七〇、全四五三頁。
- ・藤原千恵子編、図説浮世絵に見る江戸の旅、河出書房新社、二〇〇〇、全一一一頁。
- ・齋藤幸雄、江戸名所圖會1、有朋堂、一九一三、全六八〇頁。
- ・浅井了意・朝倉治彦、東海道名所記1、平凡社、一九七九、全二七二頁。
- ・永林、横濱名所之内鉄の橋朝ざくら、円や甚八、一八七二、
- ・馬頭町広重美術館、「江戸の旅東海道五拾三次展」図録、馬頭町広重美術館、二〇〇二、全一一一頁。
- ・佐々木信綱、和歌名所めぐり、博文館、一九二〇、全三九八頁。
- ・森川昭、東海道五十三次ハンドブック、三省堂、一九九七、全二二〇頁。
- ・横浜歌人会、横浜歌枕集成新版 横浜歌人会創立30周年記念、短歌新聞社、二〇〇〇、全二七五頁。
- ・中里恒子、歌枕、中央公論社、一九八一、全一八八頁。
- ・久下貞三、万葉集相模風土考、東歌考・防人解析篇、彩流社、一九八五、全二六六頁。
- ・倉本一宏、旅の誕生、河出書房新社、二〇一五、全三三〇頁。
- ・馬場あき子、歌枕をたずねて、角川書店、一九八一、全二九〇頁。
- ・高橋良雄、東国の歌枕、桜楓社、一九九一、全一六七頁。
- ・山本光正、東海道の創造力、臨川書店、二〇〇八、全二八五頁。
- ・山口桂三郎、原色浮世絵大百科事典 第9巻、大修館書店、一九八一、全一四二頁。
- ・藤沢市教育委員会、江の島浮世絵展、藤沢市教育委員会、一九八七、全九二頁。
- ・大亦観風、萬葉集書撰 再編版、奈良新聞社、二〇〇〇、全一七五頁。
- ・神奈川県立歴史博物館編、江戸時代かながわの旅、神奈川県立歴史博物館、二〇一三、全九五頁。
- ・読売新聞社編、広重と東海道、人物往来社、一九六三、全二五四頁。
- ・神奈川縣経済部観光課、観光神奈川写真コンクール

- ・作品集1951 神奈川縣観光課、一九五二、全五六頁。
- ・探訪日本の庭 10 関東・東北、小学館、一九七九、全一八三頁。
- ・高柳光寿、伊豆箱根・鎌倉の魅力、淡交新社、一九六二、全二二二頁。
- ・主要参考文献
- ・佐佐木忠慧、相模国の歌枕名所考、宮城学院女子大学研究論文集、一九八九、七〇号、六五―九三頁。
- ・吉原栄徳、和歌の歌枕・地名大辞典、おうふう、二〇〇八、全三三四頁。
- ・樋口和也、萬葉集地名歌総覧、近代文芸社、一九九六、全六八〇頁。
- ・川村晃生・渡部泰明、歌われた風景、笠間書院、二〇〇〇、全三三六頁。
- ・佐佐木忠慧、東国歌枕、おうふう、二〇〇五、全八九三頁。
- ・谷馨、萬葉東國紀行、南雲堂桜楓社、一九六四、全三六一頁。
- ・相原恵佐子、歌枕紀行、専修大学出版局、一九八二、全二九九頁。
- ・嶋津聿史、万葉東歌地名考、桜楓社、一九八二、

- 全二八五頁、(国語国文学研究叢書 第32卷)。
 - ・高橋良雄、歌枕の研究、武蔵野書院、一九九二、全四一五頁。
 - ・山本光正、川柳旅日記 その1、同成社、二〇一一、全二二四頁。
 - ・谷川彰英、47都道府県・地名由来百科、丸善出版、二〇一五、全三一五頁。
 - ・内藤弘作、枕詞便覧、早稲田出版、二〇〇八、全五一八頁。
 - ・中西進、万葉集 全訳注原文付、講談社、一九八四、全一五三四頁。
 - ・武内はる恵ほか、相模集全釈、風間書房、一九九一、全六三二頁。
 - ・源実朝、金槐和歌集、新潮社、一九八一、全三二七頁。
 - ・築瀬一雄、十六夜日記・夜の鶴注釈、和泉書院、一九八六、全四八三頁。
 - ・中世日記紀行集、岩波書店、一九九〇、全五六九頁。
 - ・岡田甫、誹風柳多留全集1、三省堂、一九七六、全三一頁。
 - ・岡田甫、誹風柳多留全集4、三省堂、一九七七、全三二〇頁。
 - ・白井忠功、海道記―隠者的知識人の鎌倉遊覧、国文学
-
- 解釈と鑑賞、一九八九、五四卷二二号、六六―七六頁。
 - ・久松宏二、東関紀行―歌枕を辿りて鎌倉へ、国文学解釈と鑑賞、一九八九、五四卷二二号、七七―八一頁。
 - ・原岡文字、『更級日記』の旅、国文学 解釈と鑑賞、二〇〇六、七一巻三号、七三―八一頁。
 - ・鶴崎裕雄、名所・歌枕巡り―宗祇『筑紫道の記』の旅、国文学 解釈と鑑賞、二〇〇六、七二巻二号、一四七―一五四頁。
 - ・永藤靖、倭建命東征物語―記紀神話の旅(2)、国文学 解釈と鑑賞、二〇一一、七六巻八号、三一―三七頁。
 - ・木村尚志、歌枕の変容―駒迎と羈旅、国文学 解釈と鑑賞、二〇一一、七六巻八号、四五―五〇頁。
 - ・西田正憲、江戸後期における瀬戸内海の新しい風景視
点の萌芽、ランドスケープ研究、一九九五、五八巻五
号、三三―三六頁。
 - ・長谷川奨悟、場所認識としての「名所観」、日本地理
学会発表要旨集、二〇二三、八三巻(春季)。
 - ・木村尚志、中世の旅の歌枕と東国―新古今時代を中心
に―、東京大学国文学論集、二〇一〇、五号、五七―
七二頁。
 - ・佐々木幸綱、万葉集東歌、東京新聞出版局、
一九八二、全一七七頁。